黒埼町の今昔

町史編さん室

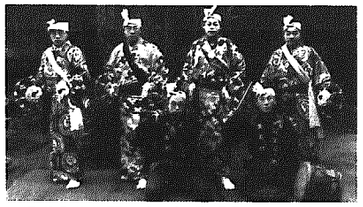
金巻の演芸部（一）

昭和八年、小平方演芸部の流れをくみ、金巻演芸部「花若」が発足

昭和二十年の暮れ、金巻青年会の楽団が誕生した。続いて二十一年、二年と大野や善久（当時は中蒲曽ノ木村）、黒鳥、小平方、木場などにも楽団や演芸部がつくられ、そこから流れる明るいメロディーは長い戦争と敗戦のショックにすさんでいた人々の心に、温かいうるおいをあたえた。テレビもなく、娯楽に飢えていた時代だったので、彼らのデビューは多くの人々の心をとらえ、大変な好評を博した。

黒埼の先端を切って発足したのは金巻青年会の楽団だった。金巻では、すでに昭和八年ごろ演芸部が結成されて、「神楽舞」や「棒踊り」などの郷土芸能が伝えられ、好評を得ていた。たまたま金巻に来ていた小平方演芸部出身の人たちが、金巻の若者たちに伝えたのが始まりという。小平方の演芸部員らが金巻の若者に棒踊りなどを教える

昭和八年から十一年にかけて、小平方演芸部員の白井正光が金巻の新宅（現・大野一郎）へ、同じく白井一風も金巻の奥次郎（現・前田松平）へ、それぞれ若いしょに来ていた。正光は地方で笛・太鼓をよくし、一風は踊りの名手として知られていた。さらに、白井正光らの先輩で笛・太鼓から踊りとなんでもこなした金子七蔵が、金巻の彦兵衛に婿入りしていた。金巻で出会った三人は、自分たちの習い覚えた踊りを、金巻の芸能好きの若者に教え、金巻の演芸会に出場しようと考えた。この話に共鳴し仲間に加わったのが、地元青年会の田辺清作、桜井恭平、高橋芳二郎、田辺



初代の金巻青年会の演芸部「花若」。前、右・白井正光、左・金子七蔵。後、右から桜井恭平、白井一風、田辺清作、田辺権作（ほかに高橋芳二郎が参加。昭和８年撮影）

権作ら四人だった。

しかし、貧しかった当時の若者にとっては、踊りの道具を揃えるのが一苦労だった。「神楽舞」はなんとしてもやりたかったが、獅子頭が高価でとても手が出ず、やらないことにし、「手踊り」「花笠踊り」「棒踊り」「なぎなた踊り」など、自分たちの手で道具の作れるものだけをすることになった。

金子七蔵が器用な人で、特に竹細工に巧みで、立派な花笠ができた。「棒踊り」の棒は木を削ったまま、「なぎなた踊り」のなぎなたや太刀も木で作り刃の部分に銀紙を張った。地方の笛は金子七蔵と白井正光の笛で間に合ったが、踊りにどうしても必要な大太鼓としめ太鼓（小太鼓）を買う金がなかった。仕方なく、大野新地の桶屋から木で太鼓に似せた代用の太鼓を安くまけて作ってもらった。しめ太鼓は古物ではあったが、本物をどこからか探してきて、なんとか道具は揃えた。

踊りの稽古は、聞念寺の本堂を借りた。住職の本多静応は当時金巻青年会長で快く貸してくれたのである。

稽古は夜間か休日だけだったが、教える金子七蔵らが何芸もこなす芸達者だったし、習う田辺らがまた真剣だったので、上達は速かった。数か月でもう「棒踊り」「なぎなた踊り」「手踊り」などをマスターした。

金巻演芸部「花若」が発足

その年の春には、演芸部の名を「花若」と決め、聞念寺で発表会を開いたところ、拍手喝采だった。その後も聞念寺本堂や新宅の作業場などで踊りの披露をし、金巻の人たちから喜ばれた。

「花若」の全盛期は昭和九年ころで、前記の踊りのほか「麦まき踊り」「狐釣り」や「万歳」なども演じた。

金巻に定着するやに思われたこの郷土芸能も、昭和十一年ころ、中心的な役割を果たしていた白井正光、一風が年期が開け小平方に帰ると、残された部員たちだけではどうしようもなく、「花若」は自然消滅した。

「花若」復活するが、戦争で再び解散状態になる

昭和十二年の暮れごろのこと、金巻青年会の若者・浅妻茂一郎、桜井貫一、前田松平、泉新一郎らは、先輩らによって芽生えた郷土芸能を絶やすに忍びなかった。なんとしても自分たちが覚え、次の世代に伝承しなければと、金子七蔵に踊りを教えてくれるよう頼みに行った。

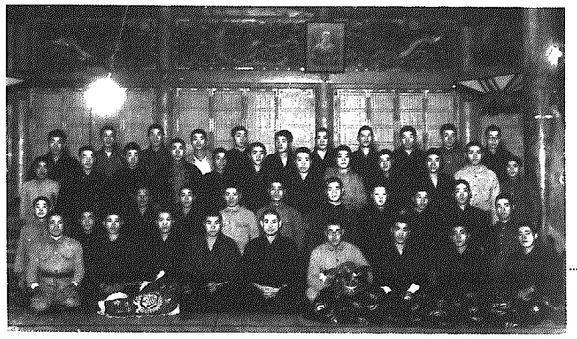
そして、農閑期に入ると金子の家に集り、踊りや笛太鼓の地方を真剣に習った。

翌十三年春、大字も、熱心な稽古ぶりと趣旨に賛同して「獅子舞」の獅子頭を部落費で購入してくれたので、先輩たちの果せなかった「神楽舞」を踊れることになった。また、本物の大太鼓や踊り用の太刀、なぎなたなども揃えてもらった。そして会の名前は先輩たちの「花若」を継承した。

この会の結成は金巻の人たちからも非常に喜ばれ、特に好評だった「神楽舞」は建て前や結婚式などのめでたい祝いごとの際にはたびたび頼まれて出演し、その祝儀は青年会の運営資金となった。

しかし、年とともに戦局が厳しくなり、金巻の若者も次々と戦場へかりだされていき、昭和十九年ころには解散の状態となった。

執筆・宮田栄門　取材協力・白井正光（小平方）前田松平、田辺伝平、小川豊作、浅妻茂一郎、今井利一（金巻）



結成当時の金巻青年会演芸部（昭和13年ころ、金巻聞念寺本堂で）写真／最前列左から桜井由蔵、高井栄六、宮村仁三郎、高井伊助、本田静応、八代一男、近藤久一、浅妻茂一郎、桜井貫一、二列目左から小野沢幸太、鈴木忠一、大野是二、保苅伊二、泉新一郎、宗村泉、高橋清三郎、野崎権三郎、永井昇平、大野嘉一郎、鈴木四郎、三列目左から金子正光、番僧、高橋芳衛、八代三男、宮村久三郎、大野周助、田辺伝平、石附清作、小川豊作、大野喜代一郎、高橋三郎、？精治、最後列左から土田次郎、金子弘、浅妻久四郎、石附生三、浅妻久六、鈴木仁太郎、大野勇一、大野伝一、近藤徳平、前田松平、小野沢政治

スポーツのわ

体協だより

たかがバドミントン？　されど、バドミントン！

黒埼町バドミントン連盟

〝バドミントン〟と聞くと一般のかたは「子供の羽つきか親子で楽しむ遊び」としか浮かんでこないと思いますが、いざやってみたら全然ちがっていることに驚くことと思われます。

私自身、既成概念にとらわれて、内心「あんなものだれでもできらぁ」と、やっている人を軽蔑的にさえとらえていたのでした。

ところが、あるとき人数がたりなくて、バドミントンをやらなくてはならないことになってしまったのです。前から口に出して広言している以上、やらなくてはなりません。そして、負けるはずのない（自信過剰？）相手に負けてしまったのでした。くやしくて眠れませんでした。

「どうしてか？」と考えながら練習を重ねていくうちにようやく、やっと勝てるようになってきたのでした。そんなことの繰り返しが続いて、上達していくのが、動機と経緯であるように思われます。

バドミントン連盟は結成されてから五年になります。現在のバドミントン連盟は、バドミントンクラブ、役場バドミントンクラブ、黒鳥バドミントンクラブ、クイックバドミントンクラブの四団体で組織・運営されています。

新潟社会人バドミントンリーグでは四部と八部に登録してあり、他市町村のクラブとしのぎを削って上位を目指し、汗を流して練習に励んでいるところであります。

また、六十三年十月には、東京都千代田区のバドミントン協会からご指導いただき、バドミントンとは、かくあるべきものなり、とご伝授たまわりました次第です。

バドミントンは他の球技と違い華やかな面が見られません。そのせいかどうかわかりませんが、小中高と継続してやっていけて、かつ社会人になってからも後輩の指導やアドバイスをしてくれる人材が非常に薄く、心もとないのが現状です。そこで、連盟として体協会長にご足労願い、まず中学校へ「ぜひバドミントン部を設置していただきたい」とお願いしてきました。学校側としては「他の部活との兼ね合いで練習場所がなくて。それと顧問の先生がなかなかいらっしゃらなくて」といってられましたが、前向きに検討してみます、と長田校長先生より快諾を得て、期待しているところです。

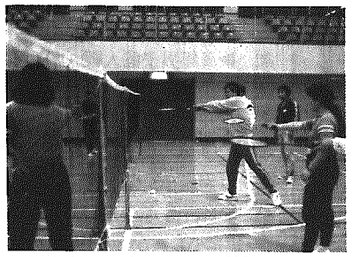
将来は、ぜひこの町から「国体の選手」を出したいと念願してやみません。そのためには、小中学生を対象にした教室を、と機会あるたびに話が出ますが、難問があって開催されるにいたっていないのが、現状です。

それなら、と言うことで一般を含めて、指導できる時間に開催したのが、初心者バドミントン教室でした。昨年の十一月七日から十二月二十六日まで総合体育館で、小学生から一般のかたまで二十二人の参加がありました。参加された皆さんの真剣な〝眼〟に圧倒され、熱意にあおられた八回の教室でした。

教える方もたくさんのことを学ばされ、これからの連盟に少なからず刺激を与えていただきました。

ただし、どのスポーツにも言えることと思いますが、「？回やったから上手になった！」とか「これが私の限度」などと言わず、できることなら「生涯続けてやれるスポーツ」と位置づけて楽しんでいただけるバドミントンであってほしいと願っています。

（黒埼町バドミントン連盟会長・渡辺平穂）※連盟加盟の各クラブでは会員を募っています。参加を希望されるかたは☎三七七－二〇七一オグマ靴店か☎三七七－三二〇一役場内バドミントン連盟事務局・大野まで連絡を。



初心者バドミントン教室での練習

勢揃いした教室参加者

初心者バドミントン教室　参加者の声

基礎をまるでやっていなかったので、クラブの方でくじけていた私ですが、初心者教室へ行って、なおさらくじけてしまいました。他の皆さんは、上手にシャトルをコントロールしているのに、何故、私はシャトルがとんでもない方向に行ってしまうのだろう？　コーチのおっしゃってる通りにしてるつもりなのに何故であろう？……とあれこれ悩んでしまいました。しかし、悩むところから進歩の道は開くと（勝手に）思っていますので、これからクラブに戻っても、コーチから教えていただいたことを頭において、練習にはげもうと思います。

コーチの皆様、どうもありがとうございました。

白川　直美

数回の参加だったけれども、試合形式のダブルスは、ルールがあまりわからなかったにもかかわらず、楽しいと思った。状況判断を適確にし、速く動き、持久力をもっとつけたらもっとおもしろく試合ができるのではないかと思った。

高橋レイ子

私は本当は三回目の初心者教室に行こうか、行かないかまよっていましたが、やはり今回も行くことにしたのです。来てよかった。やっぱり楽しい、おもしろい。

今、中学校でバドミントン部ができるとか、できないとかいうことを聞きました。「ぜひできてほしい。そして、入って、うまくなりたい」なんて思いました。

バドミントン部、できないかなぁ…

河野　裕子